

一五 生命の流れ

朝七時過ぎに起きて、念仏をする。私一人である。一人で仏参するのはありがたいものである。時には長く御聖教を頂く。書齋に帰ってお茶を飲む。朝食は頂かない。新聞を朝日と毎日と読売と読む。それから原稿、読書。十一時昼食。二時までで休む。その中、一時間眠る。二時から後また原稿を書いたり、手紙の返事を書いたり、お天気がよければ一時間位外に出て見る。疲れると横にもなる。六時半から勤行、歎異抄について語る。七時半夕食、八時寢床に入って何か読む。これが毎日の日課である。

この春は庭に咲いた小さい桃、小さい桜、小さい梨の花と、黄色な菜種の花を麦畑の間に見るだけですぎてゆく、あの山々谷々の間の桜花を見ることが出来なかつた。しかし落着いて御法を頂くことが出来るのは、かえってありがたいことである。元氣でもありがたい。病んでもありがたい。

病むということについて思い出せるのは、維摩經の維摩居士の病である。そこで維摩經を読む。彼は在家の大菩薩、私は在家の大凡夫極重悪人、彼は問疾使文殊菩薩をして「世尊、彼ノ上人ハ酬対ヲ為シ難シ 深ク実相ニ達シ 善ク法要ヲ説ク 弁才滯リ無ク 智慧無碍ナリ 一切菩薩ノ法式 諸仏秘藏ヲ悉ク知り 得入セザル無シ 衆魔ヲ降伏シ、神通ニ遊戯ス 其ノ慧方便皆已ニ得道ス」といわしめている。

私にあるものは悪業煩惱だ。やれ無明生死だ、やれ苦惱愚痴だ。だがたつた一つ彼の大居士に対応出来るものがある。何か、南無阿弥陀仏だ。彼は慧方便皆已に得度すといわれるが、慧とは般若の根本智即ち実智、方便とは方便智即ち権智、こつちには実智も権智もないけれども、弥陀はこの般若と方便との二智を持つておられりやこそ阿弥陀というのである。それがそのまま南無阿弥陀仏の名号に撰在する。この六字の前には、文殊も普賢も弥勒も維摩も「へえ」のみである。よしこちらは名号六字でゆく。すると何と維摩經でも何でもありがたいことだ。

この經の仏道品第八には、かの曇鸞大師が論証に、そしてそれを聖人が証巻にお引きになつた有名な句がある。「譬へば高原ノ陸地ニ蓮華ヲ生ゼズ 卑湿ノ汚泥ニ乃チ此ノ華ヲ生ズルガ如シ」とあるのがそれである。もつとも論註では此華が蓮華となつている。すぐその次には、「是の如く無為の法を見て正位に入る者は、終に復能く仏法を生ぜず、煩惱泥中にいまし衆生あり 仏法を起こすのみ」と、何といいではないか。「無為の法を見て正位に入る者」とは二乗の証のことである。二乗は駄目、それよりも、「煩惱の泥の中に乃し衆生有つて仏法を起すのみ」。それから少しゆくと、「たとえば巨海に下らざれば、無価宝珠を得ること能わず。是の如く煩惱の大海に入らずば一切智の宝を得ること能わず」とある。

無価宝珠とは我らにとつては六字の名号、一切智宝も同じこと。凡夫の悲しき、なれば煩惱の大海に入ったところで溺れるだけで何も無いが、ありがたいことに六字を頂いた上では、「そうでござんす、そうでござんす」とみな頂かれる。「少しでもよい

ところあれば迷うのに、まるでなくてわしが幸」と太平樂が言われるのも六字のおか
げ。

だが頭を上げるでないぞ。「高原の陸地には蓮華を生ぜず」頭の高いのが高原の陸
地、煩惱の大海に入るとは、機の深信、無有出離之縁と頭が下らぬと、蓮如さまに「我
ばかりと思ひ、独覺心なること浅ましきことなり。信あらば仏の慈悲を受け取り申す
上は、我ばかりと思うことはあるまじく候」と叱られる。弘誓の大船に乗らずに煩惱
の大海に手放しで入られるものか。

さて、話は前にもどるが問疾品に於て、文殊が仏の問疾使となつて方丈に行き、世
尊の問意を伝えて後、三つの問を出している。即ち一ニハ是の病は何に因つて起つ
たのか、二ニハ病が生じてから久しいかどうか日数の久近、三ニハ病のいえる期は何
時か、というのである。

これに答えて「推摩詰言ハク 痴従り愛有り 則チ我ガ病生ズ 一切衆生病ヲ以テ
是ノ故ニ我病ム」という。これは一切衆生は「痴より愛あり」無明によつて貪愛をお
こす、この病愛によつて有漏の身を受けて実病を感じる。この衆生の実病によつて菩
薩に応病ありというのである。私が今日病んでおるのは痴愛による実病である。し
かるに菩薩の病むは「一切衆生病むを以つて、是の故に我れ病む」のである。この言
を聞いていると何時しかに維摩を忘れて、大経の法蔵菩薩を念ふことである。

「若一切衆生得不病者 則我病滅 所以者何 菩薩爲衆生故入生死 有生則有病
若得離病者 則菩薩無復病 乃至 於諸衆生愛之若子 衆生病則菩薩病 衆生病愈
菩薩亦愈」

かくの如き言説を聞いていると、いよいよ法蔵菩薩の若不生者の御誓を念うことであ
る。一切衆生が病む間、菩薩もまた病む。如来が従果向因して菩薩となりたもうこと
が、ボサツ身を示現したもうことが、即ち衆生の病を病みたもう相ではないか。だか
ら衆生海がつきぬ限りボサツもまた滅度しないであろう。

次に第一問について更に答えて

「又是ノ疾何ノ因起スル所ト言フ 菩薩ノ疾大悲ヲ以ツテ起ル」菩薩の病は大慈悲
からおこる。凡夫の病、私の病は痴愛よりおこる。南無阿弥陀仏だから実病は私一人
しかないのだ。病苦は業から出たのだ。しかし大悲は、この業苦あるが故に生ずるの
だ。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人が為なりけり、され
ばそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思し召したちける本願のかた
じけなさよ」との御述懐がいただける。

こうして維摩経を読んでいる中に、菩薩品で無尽燈という言葉に感激して、それに
ついて一文を女性に贈ることとし、四月二十三・四日頃書きあげ、その後、中外日報を
見てをると、金子大栄師が、無尽燈という本を書かれたそうで、中外には大変師の学
業を讃えてあつた。是非読ませて頂きたいと思つた。女だけが無尽燈の行者となれ
とのことではない。男も女も、老若道俗無尽燈の行者とならして頂かねばならない。
燈が点っているか。どうだどうだ。火の滑えた提灯は荷物になるだけ。この身に火

が点つていないと、身も厄介、心も厄介、我ながら始末におえぬ厄介なしろ物だろう。六字の燈がともつて下さると、「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし」と、御念仏は報謝の行、乗せて必ずわたしける。身も心も目方が軽うなる。無尽燈ならこそ、野火のように十七願海を出現してゆく。どの火もどの燈もみな南無阿弥陀仏、百万の一一が南無阿弥陀仏。みんな集つても三世十方同一の南無阿弥陀仏。

本部の夕の勤行では、末燈抄がすみ、御消息がおわり、歎異抄を頂きはじめた。三十何年お育てを受けた御聖教であるだけ、一番によく知っている御聖教であるが、さつぱり頂いていない。これからいよいよ本気で頂きたいと思つている。歎異抄といえば大派の了祥師の歎異抄聞記、何とこれだけ徹底した人はない。この春の大派の蓮如上人四百五十年忌で、この了祥師や仏教大辞典の織田得能師に、贈講師（本派の勸学に当る学階）を追贈された。織田得能師は仏教大辞典を造る為にこの世に出られたようなもの、私の一生に於ける最大の恩人の一人である。又了群師の歎異抄聞記も、よくあれほど読み、あれほど書かれたものである。贈講師は当然であろう。皆後世に多くのものを与えて去つた方々である。中外日報を読んで念仏する。（以上四月）

今日は五月の九日である。幸にいいお天気である。今日は島根県黒澤支部十五周年記念講習会の開講の日である。午前八時、今頃は開講式がはじまる時である。私も八時仏前で小経をあげていると心は北へ遠く光善寺に走る。五月二日例会の二日目に大衆が私の部屋におしかけて、「どうか、この度は思いとまつて頂きたい」との懇請によつて、私も我が張れず、「ツツガナクゴライエフマツ クロザワ」の電報の返電には、「シユカンユケヌ：」、遂に花岡君に代講して貰ふことにしたのである。誠に相済みぬことである。

昨日もいいお天気であつた。広島県からも、広島、能美島、原、加計、吉坂、小河内等から、多くは中国山脈を横断して、黒澤まで半ば徒歩で参加したはずである。私には出席せずとも、この聖会よ美しく荘厳されて、魔事なく終了して下さいと切念することである。

花岡君に托した、記念式典に於ける主管の辞の最後に當つて、支部長を中心によく念仏一道を精進して、自信教人信、大悲伝普化の報恩行を成就するために、左の五ヶ条の心得を添えておいた。

- 一、我はと思ひ先達めくことは獅子身中の虫となることである。
- 二、他の師について一意専心精進する御同行を崇仰すること。
- 三、決して敵を造つてこれと対立せざるること。
- 四、我らを悪み誇る人を悪み誇らず、却つて我が不徳をそれによつて発見して沈黙して精進すること。
- 五、御同胞同志の間を、常に正法によつて洗い、不和を成算して、同一念仏の和を成就すること。

同胞が集つて、御讃嘆させて頂くことは美しいことである。言葉よりもまずその人の存在が光り、そこから御念仏の御讃嘆が生れるのは一語万金である。しかし「我は」と我がぬけず、居丈高になつて人を捕らえては、御縁にあわす。況んやその間に人の攻撃をし、善悪を裁けば、「はああれが光明団か」と、その地に御法の弘まる邪魔をし、御同胞をイバラの道に追込む。時に多年御法を聞く者は、気をつけさせて頂かねばならない。

御念仏を嫌う人はあつても、御同朋の中に光るかおりを嫌う人はない。序ついでに言つておくが、バスの中で女の人が、十八願がどうの十九願がどうのと話していた。その側へ、説教師の僧侶の方が乗っていた。聞きづらかつたのであろう。「あんた方はどこかへ参るのかね」「はい光明団へ参ります」、それが僧侶とわかると沈黙したそうである。その講師は、次の寺での講演に、今の話を出して光明団の大攻撃だつたとのこと、非はこちらにある。

蓮如上人は御文章の中に幾度も幾度も「他人の中とも云わず、また大道路次なんどにても關屋船中をもはゞからず、仏法方の讃嘆することを停止せよ」と教えられ、聖人は、牛盗人とはいわるとも仏法者ぶるな、と御諭し下さつた。多年聞く人はよく知つていつつこれを犯すのは、心の底に何かまだ残つているのではないか。ほんたうの御念仏や御讃嘆が、不用意にこぼれたのなら、御僧もまた念仏したであらう。

次に他の師について一意専心精進している御同行を誇つたり、無理にこちらに連れこようとしてはならぬ。その精進を仰がせて頂かねばならぬ。私は私によく言つて聞かせる。皆聖人の御同朋御同行である。

次に常にいうこと、敵を造つて対立してはならない。煩惱には敵がある。信心には敵はない。我を憎みそしる人を、憎みそしつてはならない。末燈抄にも「この念仏する人を憎み誇る人を憎み誹ることあるべからず、あはれみをなし悲しむ情をもつべし」とこそ聖人（源空）は仰言ありしか」とある。ましてや、憎みもそしりもしない人を、憎みそしるが如きことがあつてはならない。そしられたら却つて我が不徳を知らせて頂いて沈黙して精進させて頂こう。

最後に同胞の間に溝を造つて不和を生ずるようなことがあつては相済まない。同一念仏の和を成就させて頂こう。

以上は、黒沢支部の記念講習に際して全国の御同胞に捧げる悲涙である。

花は散つて春は去つた。世は青葉の夏となる。花は感激の象徴、青葉は精進の相、農家はこれから多忙となる。いよいよ、私の好きな夏である。枯れるか茂るか、退か不退か、生命の流れているもののみが生きてゆく。御同胞よ、御念仏の中に大地に合掌し念仏して稲を作つて下さい。